

卷之三

同前  
天性

天性

萬葉集畧解目録全二冊 尾州名古屋本町七丁目 永樂屋東四郎

此書を桶の千蔭大人著せし男解の用解かく古より承認点の詳り  
タゞさと初学の為す者く古云を行へ訓点と施し今之代は通じ  
易いしめちこ書きの類をみて本引求む便とテ簡板を  
記し又校正奉行丁教とも並べ記しも類毎の假字と五十類に  
あり便済し備一すり今之制點を熟讀し玉も古人の名あれば  
官名地名等の後法をも後玉古云の意をも得也

歌合同目録 凡三十六部



一天德哥合

判小野また大臣

六十二代村上天皇天祐四年三月晦日

一近江御息所合

六十八代一條院

一若狭守通宗親亡妻子達合 判通後朝長

七十二代白河院明應三年

一高陽院哥合

判師大納言經信

七十三代塙河院寬治八年

一中宮亮重家之號合

判從廣卿後改後成

七十八代二條院承萬二年

一位吉社亨合

判後成卿

八代高倉院赤麻二年十月九日

一達春門院小西亨合

判後成卿

八十代高倉院赤麻二年十月十六日

一廣田社亨合

判後成卿

八十代高倉院承安二年十二月八日

一三井新羅社亨合

判後成卿

八十代高倉院承安三年八月十五夜

一賀茂社亨合

判後成卿

八十代高倉院承安二年三月十五日

一右大臣家令合

判後成郎

八代高倉院治承三年十月十八日

時代不同歌合

八十二代後鳥羽院勅撰

一後京極自歌合

判後成郎

八十二代後鳥羽院建久九年五月二日

一御臺撰哥合

判後成郎

八十三代土御門院正治二年三月五日

一新宮撰哥合

判後成郎

八十三代土御門院建仁元年三月廿九日

一八月十五夜哥合

判後成郎

八十三代土御門院建仁元年八月十五日

一九月十三夜哥合

判後成郎

又名戀五十番哥合或号水無歌哥合

八十三代土師門院建仁二年九月十三日

不清水君官撰文合

判後成卿

八十三代土師門院建仁三年七月十五日

一建曆仙洞文合

判定家卿

八十四代順德院建唐三年

一建保哥合

判定家卿

八十五代順德院建保二年八月十六日

一光鷲峯寺榜改家文合

判定家卿

八十五代後協河院貞永元年七月

一名所月號合

判定家卿

一日吉祐文合

判定家卿

八十五代後協河院貞永元年八月十六日

一遠鳩哥合

後鳥羽院勅判

八十六代曰條院赤祖二年七月

一撰五十首奇合

定家卿 家隆卿

一百三十首奇合

判為家卿

八十八代後淳景院寶治元年

一伊勢新名而奇合

判為世卿

九十二代後伏見院正安三年

一律勢外官北御門奇合

判小倉公雄卿

九十五代後醍醐院元亨元年

一五十首詩歌合

九十八代景光院

一新玉津鴻哥合

九十九代後光嚴院貞治六年三月廿三日

一康正内裏奇合

判忍辱尊雅親卿

百三代後花園院承元年三月廿三日

一親長ノ家百三十番手合

判一條祿閑

百四代後法門院文明立年十一月七日

一七夕哥合

判一條祿閑

百四代後法門院文明九年七月七日

一三十番手合

判鬼鳥井榮雅

百四代後法門院文明十三年十一月十五日

一文急三年詔合

判友原為廣卿

百五代後柏原院文急三年六月十四日

一秋十五蟲手合

百七代正親町院永祿元年八月廿三日

内裏哥合

天德四年三月晦日  
於清涼殿有北事

題

霞

鳶

柳

櫻

歎冬

藤

暮春

首夏 那花 郭公 夏草 戀

歌人

龙

朝忠卿

坂上望城

大中臣経宣

少貳介婦

藤原博古

右

平氣盛

藤原光真

中務

天惠

王忠見

清原元輔

源順

本院特授

詩師

九

延光朝

判者

卷之三

九

七

中將更衣

率相重合

藤典侍

少貞命婦

卷之三

其衛命婦

兵衛藏人

江庫藏人

冬河藏人

勅員藏人

侍從藏人

本工藏人

官內藏人

源為明

源重信

源盛明

藤博古

源延光

源重光

藤賴忠

清原元輔

源保光

藤伊尹

藤文範

藤國光

源時經

藤忠君

藤無家

平時經

藤助信

源伊陟

藤為光

藤清遠

大江井光

藤守仁

藤浦時

大江井光

平弥枝

藤重輔

藤安親

藤清至

源時仲

藤永保

藤雅找

藤為光

左

平保遠

童

右

藤元明

源時明

真面

藤道隆

藤朝光

藤島時

藤保名

藤景齋

義理

藤惟賢

能正

藤信賴

延正

一  
者  
震

九

勝

東忠

卷之三

卷之三

左右哥讀合勅小臣曰可定奏勝劣者逡巡奏云小臣繞雖備三十一之字全難辨勝劣之義伏請天裁勅云若不定勝劣已失今日興兼結後代鬱欵揜速可定申者遇天氣之不許表空慮之拙而已

ひ乃只在勅定小臣屢作天氣遂無左右 作因  
以大為獨

二番 鶯

拾送 右 勝

拾送

右 勝

順

さはとめ小こまくぬ毛れ右側りぬまくのち  
続拾送

兼盛

ひすとて當つてなくかねと度とてくふをやうりん  
右側のひくへいわゆりー左奇うーかたもれり  
すそとくにゆく興うくとよむよゆーとひだ

あ鳥

三番

左 勝

朝忠

葉

ひうやとめ梅うえすみくらひとへゆれゆるとに事とせあう

兼盛

詞花

右

さはひれのひやそりくぬ柳とすれかくちとまのやうを  
きゆくはいととくも小柳とくらくくよ  
白ぬの雪うりやまぬすくうえよ今そううひととまとかくなれ  
うそてよろこびれと、左奇とくくしてくせりか  
右講師博雅朝臣誤讀柳哥，左方論云須讀申鶯，  
哥而誤讀申柳，不可。讀申欵者以左方論，  
申旨奏聞，仰乞可據定申者。小臣奏云，左方之耶，  
申非也。謂如此之事，只隨時之議，但依人之誤，何留其  
哥，仍令該申其時博雅朝臣頗變色，速不讀之，雖難  
讀揚其音振被為尤人，唉，又奇の祠りうるひととま  
れあくことくことくことくことくことくことくことくことく

四番 柳

卷

龍

望城

あくなみ代うとけくとも柳の糸ひはまとまつてゆき

右勝

兼盛

さほひ先のやをためくも柳とひるをうそまれゆうせ  
欲讀タメテ右哥シロコ之る龙方人申アシタケ件柳リヤマツ哥コノ違盜次第ハラフ讀  
事先畢タマニ而重欲讀タメテ之ヲ忘首尾ラタタイ者小臣答アサヒ云ク寫哥シラヒコ  
時隨タマニ龙申已有裁許重不可シカニ申ス右哥シラヒコあくま  
乃ハシテと有アリわよきうなづハナヅる等トをあと  
かけとと難ハシタと仍以右為勝

五番 櫻

朝忠

綱ハタケ千載チリ

1999年化ハタケ孫チリうりやま柳リヤマツ也ハタケじはハタケれのまけハタケえん

右

元輔

綱ハタケ松マツ送ハタケ

よりふらうとハタケうし櫻リヤマツむわうねんハタケうあき  
右哥シロコいハタケもわハタケとハタケんハタケも難ハタケうハタケくハタケい  
わよハタケうハタケねハタケとハタケせハタケなくハタケきハタケもハタケすハタケわハタケも  
あハタケ後ハタケとハタケれ又ハタケうハタケとハタケくハタケりハタケふハタケわハタケる

六番

龙持

紹宣

桐花ハタケ

さくハタケうハタケきハタケらハタケのハタケうハタケりハタケうハタケあハタケまハタケとハタケわハタケば

右

通盛

櫻リヤマツむハタケかハタケとハタケうハタケ八ハタケ年ハタケれハタケゆハタケとハタケくハタケてハタケあハタケえ

ちハタケむハタケとハタケよハタケくハタケはハタケまハタケとハタケりハタケねハタケあハタケる

七番

龙勝

少貳令婦

捨達ハタケ

あハタケいハタケうハタケかハタケのハタケうハタケ櫻リヤマツむハタケのハタケうハタケ風ハタケうハタケすハタケすハタケ

天術

六

七

仲  
榜

年々の事つゝもあらざるがえりせ

よもやまのそくはく、  
あやめのそくはく

八  
卷

龙  
腾

順

右  
兼盛

まこと井の川浪もくらむとこもあめやまくらのそれ

金本

ひきはまやまきひむきえんてすまむちやまのまえ  
なすりゆくうまきうきとみらもたら八重ま  
うじのひきはまきうんひきなうやくうじめ  
うそわくめんをわくみかくとくへまくうすひを

三

やわん又上方のモトれり

九番发

卷六

綱  
千載

卷之六

前後拾遺  
用  
義盛

お前もまたおはとゆくとおもひておひで

合ひてわんてよせぬもあつま  
しれど

やあらば事うそとよすへうけりす  
おもてゆきくわふるはりよきれんめいとく  
うそとよきれんめいとく

大德

わくわ あら氣をとさうりとやへゆう小臣向源大  
納言云々を艶也あくまく持よ隠之間ちも人申云々  
奇の友浪あくまくらひといふ也然りこと可先仍  
ひ右も勝

十番 暮春

わ千載 龙勝

朝忠

花く 小そらへてすれめがくいとくすれゆうすくす

右

博古

行まほこまうすくすのあくまくわくまばくれゆく  
たすくまもおけうまひをありてゆくとすくぬ  
たまうやうなりうもとくわくわくの左も勝

十一番 首夏

左持

能宣

さく あはまくはなとまくはのうすたあはくらとまく

右

中務

あはまくらあはくはなとまくはのうすたあはくらとまく  
たすくはのうすくとまくはのうすたあはくらとまく  
うすくとまくはのうすくとまくはのうすたあはくらとまく  
うれひのすくとまくはのうすくとまくはのうすたあはく  
ほくなれら持すと定め申

十二番 夕む

龙

忠見

さくゆくひよのうすくはなとまくはのうすくは

右勝

魚盛

わじのくまくはなとまくはのうすくはなとまくは

方奇山の夕むとまくはのうすくはなとまくは

十三番 邪  
山

卷之三

望城

はのうをなまくらむあかり時もる原山とわれあわせ色

卷之三

一  
二  
三

十四番

十四卷

忠見

右元真

۷۰

おおきいとこねえや  
まんまとわざ

されど奇行にてお人ありとと一をさへ  
きくといひゆるまことに之  
をかうそむらをすりてゆるがよ  
すなれどわゆを定め

十五番 夏草

九  
勝

系

後拾遺  
文書が多うてあまつたが、そのうちの下葉などて人うら  
ち書かれてゐる。あくまで人うらの筆跡である。

十六番 懲

尤 脩

朝忠

人はくよもとまつあかくわのひじらにのこきやまと

右

中務

ひはがのうれ爰ふゆくくはりやと紙ふかきまし  
ち可いがおはづくはりにとくまきといくともも  
な舞ち可いもあととさりうりとくま事へね  
もとよとせりづくすへむりやうされとくはり  
やうりうなまきのうへ 奏されいあやまらば  
うんめいそとゆりきとわまことひたる勝

十七番

左勝

能宣 集三版

えりき絵をやつまくうくさん爰ふやへどゆく和を公  
右

中務

君子かう爲ふくよわまの

月日

きりきり

十八番

右持

平院侍後

後拾

右

中務

ひくよ井の月とけりなんちひくよまややくらやく  
左寄きをうりかんち寄のうトれぬのくよせに  
冬字をわからめくだけよそいとくづくめくきて  
奏されとひの作かたのくらたはくりうす  
くじとやうれとひがう難みわらぬまと仍ゑ

十九番

左勝

朝忠

かくとれゆうなまくにんとくわがまうくまほ

元真

後拾送

君うそてのりはまくほくすうりのせうくてまふいきなめややうとん  
乃ち辛いとわくこれとたのうへ何ううけたりと  
以てゐる所

二千番

龙

忠見

拾送

右

勝也が無事子

通盛

之のれとくに出小なりよりひのねやせよと人内みゆまく  
小臣 奏云方有奇俱以優也不能定申ス勝劣 勅  
各尤可歎美但猶可定申者ス小臣讓大納言源朝良敏  
屈不奏此間相互詠揚各似請我方之勝タ小臣頻タ取  
天氣未給 勅判令密詠右方哥源朝古密語云 天

龙

朝忠

七首

六首勝

一首負

順

入二首

皆勝

一首負

望城

入二首

一首持

一首負

能宣

入三首

一首勝

一首持

忠見

入四首

一首勝

一首持 二首負

小貳命婦

入首勝

本院侍從入一首持

右

兼盛

八首

四首勝

二首持

五首負

元輔

八首負

左院侍從元輔哥後拾遺皆兼盛也如何

天德

博古入一首負

入一首處  
入二首處  
一首持  
一首負

元真

中務  
入五首  
二首  
三首

く。まよのやドアは銀のまよ哥。ひにくもせぢらが  
見はきんとほくらりともくらうのすらやからもくつて  
きとくもくとくもくとくもくのすらやから。わゆいひくもく  
ひくもくのすとこわくもくもくがわいひのめくわくわく。やくひくもく  
あくもくもくわくば竹のさにはくらして。うくもくにくにくに  
えくああたんへあくをうく。うくもくくみかこのくもく  
ゆくあくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくく  
くくくくくくくくく  
くくくくくくくく  
くくくくくくく  
くくくくくく  
くくくくく  
くくくく  
くくく  
くく  
く

ちのあそびの朝也。右近もまたのわざ。すらりのりとひよど  
奇うらとすむ。ゆきとてくちもうちだにすく手れうらまきの  
よもやまをぬく。すやすりくちまたうるおへくふくのわざん  
いそんさうりとやりうり。またれゆくとくみやくわくや。秋  
とくらむく。乐ふのとめこととめり。ちもくもくもくもくれとあ  
とあよとれく。ぬ。左のこくひくらは。とくくとくくひ  
てくうのくもくく。との大きちのくもく。けくのくもく  
ひとえきんのく。かくら。珍いくのく。りもくら。くそん高門。  
ふきよくのくえきりのくあれ朝也。左近もまたのく。ゆの  
りもくのく板のくらくまく。くくくくくく。たよぶ深大  
切えひし。あとやねりまくの朝也わざえ。うそりかくきりゆ  
のゆきあくのくと。のくあれ朝也さうのくゑ。右近もまた  
のゆきあくのくと。のくあれ朝也さうのくゑ。右近もまた

てあがへりとすよ。ほんのうるさくへうよ。たゞてお  
ちやあねうみよをあまよ。あわへつたてあやまへ海の  
こゑ乃ヨモテリ。ふるわづへ。うくわきかほくふれ  
きぬ。あひりのよなみわざうに。あらわきかとおだに  
みかんのよくとまへり。とくまきあやめは  
いとまうす。おれんかくまきうじとよくふて  
卫の網はかづきうるさくれぬたのうむひんみれ  
ういとんから。持くひくまきうじ。えんきうらゆ  
きうを「りあよ。たとあひなけのうそく一そう。大  
納戸めがうちまわやのほすまうひくまうね。まゆうよれひ  
きくのほそか。般と樂あひくよハシ。たとは  
まのううひとせうつりやひあそひくわらまくはとひ  
かくわらよ。あやめのそれりうみとようとくでよ。

のほりうみ草とようとく

三月二日。たとあ人のうみとよなうみとよくへとがくの  
うのゆうしかくまう。それ二月十九日より乃うくれ  
出でをあきまう。かく。三月六日とよく。それからとよく  
のゆうとよとよく出でたる。

すとー うみとー やかー さくー

やアモー トウー 美のくー れの友ー

ヤカキニ うのむー あうのまー こひス

うとととみの目れりうしのとよ。清涼敷のゆゆりそろ  
みとひまわきをとひ。後涼敷のとよのよやう  
し。めじよつれ。ちまく。ばうとひ。ゆく。まくと  
のゆきとみかこのうかの本裁うとをひ。あふた

友のむかみい右やまきのむらへもせりて。まくの死人  
令婦へゆきのきこみかみりやまのうちよ左とま  
うやね秋葉のものわく内改。うちよのひじよも  
あのそくぬそもあすとこくらへうらめりてゆきよ  
よもすそりぬえうへすくぬよどまつ。秋葉東も  
ちばきよやあきのむけのほくうものなうさうくや  
りひてうほかうとすくぬれゆかひあとんとくそくよ  
てめひりのそく。うちよたわくたもがくすくまのま  
うくへるよらじようのすらやきり。まのよく深香り  
ちのうのそくやきり。奇ううのこねとくうむす  
てキよもひひりえくもあめり。うひの奇へねぬより  
しきうとよわから。花のうひよつめり。うひの  
ちをうひあり。まくよつまともく。日のうひよつめり

てとひづらみあはくもとひやうく。ううくとす  
たうくまくまうと。を夏ひみのうのうれはのとす  
しゆうと先きせね。れとそくれはた後見人あくの  
うきびくとまう。をせね。きくよのうすく  
す。うれがふゆくくくれね。え死人夏のうれを  
きくとををさく。ねりをゆめり。うゆうま  
ねやにとくとく。をまう。あくらもくらとまう。う  
うてえくとくぬとまう。ねりをわらとまう。  
ぬえよくへり。れとくねうひ。うすくれと  
らのうれみあへつてく。ねはくとく。うくわ  
らとく。れひうく。うのうく。うくわ  
くとく。うくわく。うのうく。うくわく。

左のやうくしくやうすくともかくらぬぐる  
ううまつた。左のやねうらうらしたて左のやね作みり  
ちゑんへサ将やかくすれどうじまは後ゆねども  
アモトのちあうり哥のうじあらめほくり。左のやく、東  
あわね附ア花幸桐桐成源大納言高明源寧雅信左のやん  
後涼夏のところこみかよきすみのくり。左のくり  
男女房はわくもくらしてたのうし右參忠蕃源のふ  
うちもと。ともぬのねほひとすうひよわき。やま  
みの花のえふれ一尺五寸あり。左のくり  
うりてうりてすひよめく。もくひくよ奇のうき  
もたづく。うもくもくとくけとくみとくわくすが  
うらうけうらよけたり。左の侍作源中ねむらすまど  
まのやうひのゑんへサ将すきのふり。後ゆねうる

うりてうり。かくてテととわくもくめうり。うりてうり  
右のやくよく。うりてセリく。ゆうそひはうすまつ  
うりへたもうり。あさのかくくぬ。たのゆくくく  
のと。勘察也。友のうえ。もあがく。琵琶太鼓  
をうりき。今伊豫掾りもと。わ琴ハタケ左の轟カムイ門。管絃  
をうりき。今伊豫掾りもと。わ琴ハタケ左の轟カムイ門。管絃  
ね。あらしきものうと。うなづく。うたひよとくう  
ぬ。右の源大納言ひし。左のやねむらまとの朝日。わ琴ハタケ  
のうと。うみ。ぬ。左のやねむらのうと。うたひよとくう  
ぬ。うと。うみ。ぬ。左のやねむらのうと。うたひよとくう  
ぬ。左のや下の人とその左よとくうぬ。左のうと。

ももとれすそこ。うららかにうるおひをやんがきま  
りす。あれへまくみやうりもゆこまくまくまく  
わらひひひ。三月のつらうきのひなれひどもまのち  
うえひく月朝日はとまよううらしてたのえのうまよ  
くらきりおれゆなれそれかくまとくらりうくまわ  
らのまよまよめりゆあひうりわくくけぬひのれとくら  
きくよまよめくらりくらりうれのきなうせのよもひと  
まくらうりあくらうふもくとあくら部くまくまくまく  
ゑくわあまれとくらとまくらとあくらとあくら  
ゑのむくらうきくわくられとくらのあくらとくら

天德四年三月廿日哥舍左使君日記

哥倉の又乃はくをくたうちめとさへて大貳好古  
の宰相右近傷害罪に付せられたり  
ちの浪の主であれかへりゆもとやねね

也

朝忠宰相

もともにあらとおもひ候のそめひあつてありまされ  
あまくはやくたへのすを  
じはあらめりまつりてぬ候の君がまうむひととされ  
哥倉あとと宰相のくみつてす

上

もとくのふねむのひめむのほめくわく  
沙翁

みちるうぬの山あわぬあはくはくとまくと

又弁のえ衣アフツモ

吹風アフタヒキテクヌチハ吹きの月をアフツモ

沙翁

アラタナシルアモヤモロウモトモアリハアトモア

近江渟息所歌合

題

梅

かみそ揚

夜桜

梶本花

楓

柳

わゆら

えれむ

山ちきのむ

山なづれ花

花柳

火櫻の花

岩柳

いねやもむ

岩柳

足利しの花 う紀草

心事

筆もろこれ

みやもと三ノ角の山アマツノヤマ  
えり花やりゆことあらひ

右もうもせと

梅

香あわてやうそあされ稀ハリをもるの意イニの立タチく

柳

いたまどす枝ハシをわんまハシ柳ハシの花ハナもいふあまうとよだれ

花柳

むらうめうめ川カワも春ハなみをまらひかね雪スヌがとそつう

のめじらしく

ゆれぬ風に橋を渡してからまきくわね匂ひがす

ほづら

鳴り木此の木の音がさうすくひどせ

火櫻花火

棹らしき心の小櫻あらうわみえぬ火櫻のそれ

庭櫻

拾遺わづやうとうとむとれ櫻花らうかとくとすてん

なれこれ

意きそがいわとなれ、もぬわがはじるくならひたま

まくらむ

ゆきつがすとよしゆきとだまそまくらむ

卷之三

江東戶  
稅局

# わらわ本のむ

わざとあわせたの本をばらまくにあつて、

卷之三

蒙古文

沙門院

なあえひあもひむらにまくわうひのうひ

卷之三

奇麗なるもとよりよきものなり。萬葉集

山東

世間の事は山の事より多くあると云ふが

五

金  
柳  
色  
照  
山  
川  
水  
如  
此  
也

九月九日

君はおまかでやうにあつたと

卷之三

水のうよきあらわすものむかし

山本のむ

久は城下にひそめ  
まよひのれをもよけりひよれ

卷之九

はるにあわくはる  
萬の都をすてて  
さうしき

